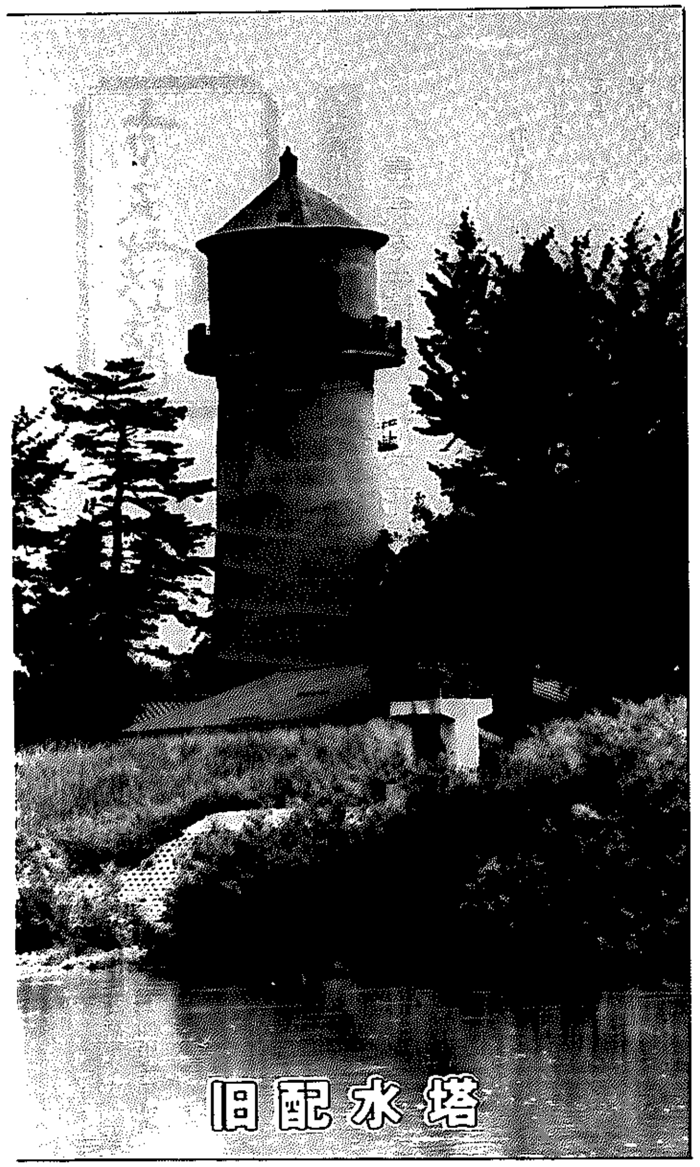
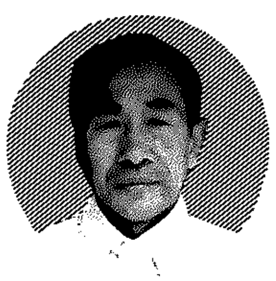


周囲が一望できる塔は白根のシンボル



語る人
浅原義雄さん＝（六一）
（諏訪木一）

私の思い出 昔のわが街

配水塔ができたのは、確か昭和六年ころだったと思います。当時としては、大変にモダンな形で、この辺では一番高い建物でしたよ。護摩堂山からもよく見えたものです。

子供のころ、配水塔によく上がりました。白根町が一望できたほか、巻町の鎧潟や新潟市関屋にある会社の煙突もよく見えましたね。

戦時中、配水塔があまり高いので、「これを目標に、B－29が空襲にくるぞ」と、冗談をいい合ったこともあります。

配水塔のすぐ脇には白根庭園や桜並木があり、また最近では近くに水道公園も完成し、この周辺が市民のいこいの場となっています。

最近は老朽化が進み、取り壊すという話も聞きますが、白根のシンボルとして復元し、ぜひ残しておいてほしいものです。

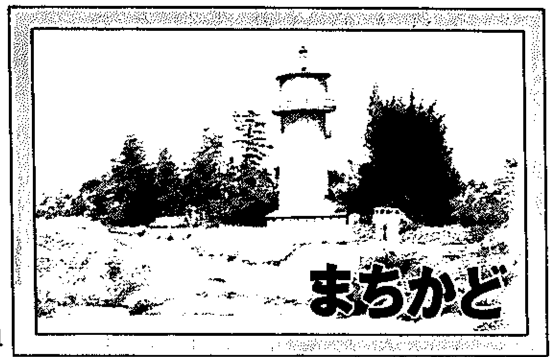
白根 人物伝

★大矢（おおや） 透（とおる）

文学博士、仮名研究家。根岸村高井の名主辰次郎の五男で、幼名を又七郎、葛洒舎、水斎と号した。慶応二年（一八六六年）十七歳の時、新発田藩銃隊に入り、明治三年新潟皇学校に入学、郷社諏訪神社の社掌となり、同八年やめて官立新潟師範学校に入学、翌年卒業して山梨師範学校につとめた。ついで茨城師範学校に移り、明治二十年文部省属、また台湾総督府嘱託となり、教科書の編さん、台湾方言を調査した。同三十五年国語調査会に入ってから仮名の研究を一生の事業とし、仮名遣及仮名字体沿革史料、仮名源流考、韻鏡考、周代古音考等を著わして、大正五年帝国学士院より恩賜賞をおくられた。同八年奈良に移り、正倉院その他の古経巻の訓点を帝究して発見するところ多く、同十四年七月文学博士の学位を受け、仮名の研究において第一人者となった。昭和三年三月十六日に七十九歳でなくなった。著書論文が多い。

（越佐人物誌から）

「私の思い出 昔のわが街」欄へあなたの思い出の場所を。連絡は企画財政課広報広聴係へ。

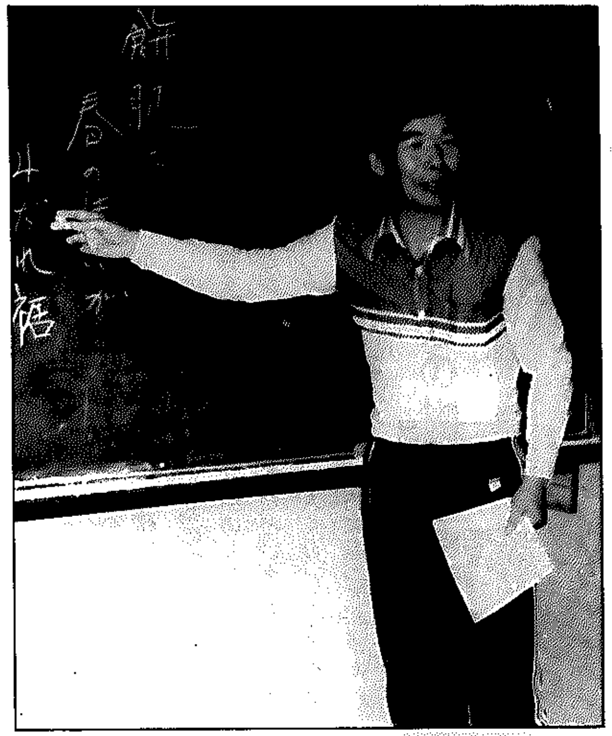


まちかど

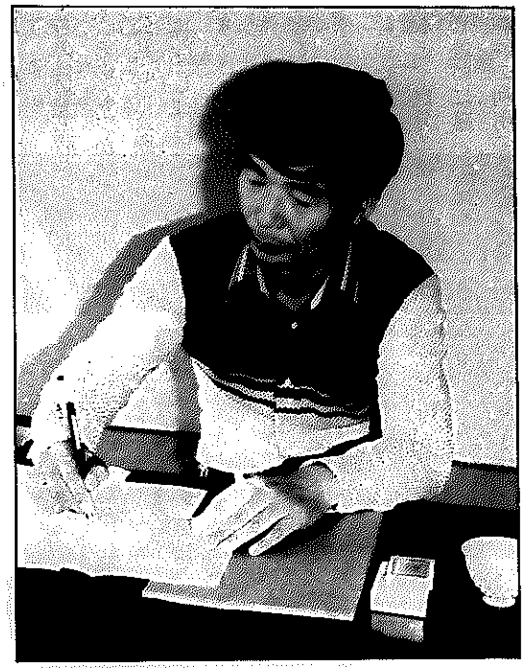
こんにちわ

白根川柳大会で市長賞を獲得

今井七郎さん（五六の町・53歳）



「多くの人から川柳を楽しんでほしい」と、川柳講座で受講者の指導にあたる



人との話し合いの中から川柳の材料をひろい、夜中に句にまとめる

川柳大会には、新潟や佐渡、五泉などから約七十人が参加

五月十五日、産業厚生会館で開かれた『第六回白根川柳大会』で、今井さんが一位となり市長賞を獲得しました。この大会を主催した白根川柳文芸会の事務局長として、大会の運営、要項作成から進行まで、裏方役もつとめました。

若いころは陸上競技に熱中。その一方で、中学校女子卓球部の面倒も見ていました。そんな今井さんと、世相や風俗を十七文字で鋭くえぐる川柳との出合いは——。

三十九歳の時、「老後の趣味を何にしようか」と考えながら新聞を読んでいると、川柳欄が目にとまり、「この程度なら俺にもつくれると思った」のが始まりでした。

さっそく新聞社へ投句した「満点を担保で借りるお小遣」が、入選に…。子供のころの思い出をよんだもので、初投句で入選。以来、川柳との二人三脚が続くことになります。独学で始めた川柳ですが、今では年間百句は新聞の川柳欄に掲載されるベテランに……。

現在、月二回、中央公民館で開かれている市民文化講座の川柳講座で、初心者の指導にあたっています。「ユーモアも交えて、わかりやすく教えてもらっています」と、受講者の評判も上々です。

「川柳の効用は、利害関係がなく、人間付き合いが広がること。それに何といっても年齢制限がないことですね。そんな川柳を、もっと多くの人から楽しんでもらいたい。そのためには、やってみたいという人がいれば、どこへでも出向いていきます」と語る今井さんです。